
神の殺し方

館波実笠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の殺し方

【Nコード】

N5453B

【作者名】

館波実笠

【あらすじ】

世界の大半を焦土とする大戦が終結し一世紀が経とうとする現在。人々は『神』を崇め、生きていた。ただ『塔』として存在する絶対にして唯一の『神』を。そんな『神』を殺す者が、この世界には存在した。

第1話「世界」(前書き)

また長いモノを書きたくなった館波です。初めて読まれる方は初めまして。他の小説でご存知の方はお久しぶりです。今回は最後までしばらくかかる小説ですので、毎回毎回を楽しめるように書いていきたいので、よろしくお願いします。

第1話「世界」

世界の三分の二を焦土にしてしまった大戦から一世紀。人々は低いレベルながらも文明を維持し、生活をしていた。

国という概念はあまりなく、力のある者が一定の範囲を領土とし、支配する。そういったことにより人々は集団を作り、暮らしている。大戦前と世界は大きく変わり、まるで別世界のようにもあると戦前から生きている人は言うが、実際その通りであった。生活レベルなどがそのいい例だ。

過去に世界を縦横無尽に走っていた道路交通網は壊滅的なダメージを受け、復旧は不可能となっている。それでも懸命に人は集団同士での連絡手段を用い、それなりの生活を送っていた。

一番の変化といえば、大戦のもたらした『エクステンディットフアクター』の存在。

人間であるにも関わらず、人間では決して起こすことのできない現象や、することのできないことを行う人間のことである。もちろん自然に生まれた者たちではなく、人間が戦争で勝つことを目的に創り出した人間のことで。人間以上の能力を持ち得てはいたが、戦争が終わった後は創造主である人間からの恐怖の対象となってしまうった。

ただし一世紀もたてばそのような者たちに対する差別的な意識も消え、同じコミュニティで生活することが普通である。だが、中には未だにそのような者たちを差別し、今の世界には不必要な者だと考える集団もある。

世界は様々な考えの下に分かれている。

そのように分かれている世界で、一番に信ずるモノがあった。

『神』の存在である。

絶対的な存在。誰も取って代わることのできない存在。

その『神』が世界中の人々の心の中にあつた。

そんな世界である。

第1話「世界」(後書き)

今回は導入部分ですので、次回より本格的に物語始動です。お楽しみに。

第2話「街」

一台のホバーバイクが日差し強い砂漠を疾走していた。バイクに跨る人は砂漠に紛れるような色をした布を頭からかぶり、さらにフードをし、顔に対してやや大きめのゴーグルをつけている。

白い砂塵を巻き上げるバイクの先には一つの街コロニーがあった。

ぽつんと砂漠に孤立するように存在するその街はこの戦後に生まれた広大な砂漠地帯のオアシスを中心に栄える街の一つだ。

街Ⅱ都市としての機能があるため、入るためには審査が必要となっている。

バイクのライダー……エミネ・クラックス。年は十七ほど。ボブカットにされた髪が乾いた風になびいた。

審査受付ゲートの前まで来るとバイクを停め、砂塵避けの布を脱ぐ。

すらっとした四肢に機能性を追及したようなやたらとポケットのあるジャケットを羽織っていた。デニム生地タイトスカートから伸びる脚にはポシェットのような小物入れが巻きつけられるようにしてセットしてある。さらにバックパックと、少女が一人で旅をするにはいささか重装備な気がしなくもない。

「次の方？」

「あ、はい」

呼ばれたことに気づくとエミネはバイクを押しながら受付へと近づいた。係員の前にやたらとごちゃごちゃしたバックパックを置く。

「入街目的は？」

「観光です」

「おや、珍しいものをお持ちですね」

そう言い係員が取り出したのは映像記録用デバイスだ。

大戦前の遺産としてこれらの遺産（過去は電子機器類と呼ばれて

いた物）を持つ者は稀だ。それもそのはずで、それらの大半は過去の大戦で失われてしまっているからだ。

ただし、発見された物は現在の技術で解析され、新たに開発されている。そのため電子機器類が普及していないというわけではないのだ。稀である、と前述したのはエミネが持っているデバイスがマスターピース（一点物）であつたためだ。つまり発掘されたそのまの物であるということである。

「はい。実は職業で……」

「職業？」

「ジャーナリストをやっています」

「はあ……その若さで」

係員は感心したような目つきで微笑した。エミネも微笑み返す。

「はい」

「そうだね。不審な物もないようだし。パスポートはあるかい？」
促されるとエミネは太もものポケットから赤いパスポートを取り出した。係員がそこにスタンプを押す。この習慣だけは旧世紀から変わる事がない。

「ようこそ、『リンレイベル』へ」

係員の声を背にエミネはバイクへ戻り、バックパックを担ぎ直した。

第3話「男」

係員の声を背にエミネはバイクへ戻り、バックパックを担ぎ直した。バイクにまたがり、エンジンをかけようと……………

「だ、もう！！　だから言ってんだろ！？　どこか不審なんだって！？」

そんな怒気を孕んだ声が聞こえてきたのはそんなときだ。

エミネが振り向いた先で、別の審査受付で一人の男が係員と口論になっていた。こんな場所で口論なんて穏やかではない。なにかと思ひ、

「ええ……………？」

思わず目を丸くしてしまった。

男は灰色の砂塵を防ぐためのロングコートを着込み、荷物はバックパック一つだけ。その他はなにも持っていないようで、エミネに比べれば明らかに軽装備。フードの隙間から垂れる赤紫色という珍しい髪色が特徴的だった。だがそれ以上に……

「な、に？……仮面？」

男は仮面をしていたのだ。幾何学的な紋様が刻み込まれた、不気味な面を。どこか太古の民族衣装にある仮面を連想させる。

「……あのな、あんた、その仮面を外してからそれを言ってくれ。そのままじゃ、誰がどう見ても、明らかに不審者だ。OK？」

さすがに係員も呆れきった表情をしている。当たり前と言えば当たり前である。

「あ……」

男は今現状を理解したのか、仮面を外を外そうと手をかけた。

「……うわ……何よ、あの馬鹿」

エミネが冷ややかな視線を向けつつ、ゲートをくぐった。

このときはまだ分からなかった。彼が、自分にとってどのような存在になるのか。

そしてこの先の未来のこと……

まだ、なにも、知らなかった………

第4話「神」(前書き)

だいぶ間が空いてしまいましたが、連載再開です。また不定期連載ですが、これからもよろしくお願いしますm () m

第4話「神」

ゲートを入ってすぐある大通りは、その左右に商店が広がり、にぎやかな印象を受ける。街のいたるところが活気に満ちていた。

「まずは……泊まるところよね」

そんなことを言いつつ、エミネの視線は少し上へ向けられる。

彼女の視線の先——そこには天高くそびえる純白の色をした塔があった。あまりにも巨大なそれはこの街のどこからでも見えることができる。

それこそが『神』の住まう塔——または『神』そのものとして崇められているものだ。

エミネの視線が心なしか鋭くなる。

彼女にはジャーナリストとしての表の仕事以外に、裏の仕事が存在した。情報屋。文字通り情報を生業とする職業で、エミネは父親からその職を継いだ。

そして彼女がこの街を訪れた目的は、中心にそびえる『神』の正体を探ることだった。

『神』は存在する。それは絶対にして唯一の世界の理であった。「なぜ？」「どうして？」などといった疑問を口にする人間は世界に存在しない。少なくとも表立っては。

しかし同時に『神』を見た者は存在しない（『神』に仕えるときれる神官は別だが）。正体は謎に包まれたままなのだ。一体、誰が、なんの目的で、いつ、『神』としたのかは謎なのであった。

その正体を探ることがエミネの今回の仕事だった。

「そして……『神殺し』」

『神殺し』——文字通り『神』を殺している人間のことだ。

『神』というものは表向き、その意思を伝えるために各都市に塔として存在しているが、それらを殺している人間がいるのだ。こちらにも調べなければいけない一件であった。

「……ともかく、まずは泊まるところよね」

第4話「神」 (後書き)

前置きが長くなってしまってますいません。これから物語りはようや
くまともに動き始めます (苦笑)

第5話「軍」

検問ゲートの前に一台のバギーが停まった。

そのこと自体、この検問官を勤める男たちにとって問題ではない。このような車に乗った旅人がしばしばここを通るからだ。

彼らにとって問題はそれに乗った人物であった。

カーキ色の砂に汚れた軍服を着た男と、同じくカーキ色の、こちららびしつと着こなした女性。

男はバギーから降りると適当に刈り込まれた金髪をぼりぼりとかいた。どこか面倒くさそうな印象しか受けない。キツと女の方が男を背後から睨みつけた。少し目深にかぶった軍帽から溢れるようにして滑らかな茶色の髪が腰まで伸びていた。

「あゝ、『リンレイベル』の検問はここでいいんだよな？」

「メイラー隊長……」

鋭い声が男を制す。

「ん……むう、なんだね、ジェシカ？」

「もう少ししっかりとしてもらえませんか？」

おそらく男の方が上官なのだろう。見た目ではわからないが（会話でもわかりづらいが）どうやらそうらしい。

「わかったよ。……ええと、検問官？」

いきなり話を振られ、検問官の男はびっくりとした。

「は、はい？」

「今日、ここを通った人間のリストをくれ」

「は……？」

男の言葉の意図を図りかねた検問官は疑問符を浮かべた。男は苦笑すると、説明をつけ加えた。

「噂には聞いているだろう、神殺し」

その言葉に検問官はどきりとする。

「まさか、その神殺しが、ここに？」

「……いや、残念ながらそうじゃなんだな。その神殺し、そして神について調べようとしている人間がこちらに逃げてきたらしい。生憎、ここ以外に逃げ込める町はないんでな。入国者のリストを。それと——」

男——ゼイン・メイラーが言葉を切ったのは、遮るようにして聞こえてきた低い車の駆動音のためだ。その正体はトレーラー。運転席が見上げるほどの高さにある、超がつくほど大型のものだった。トレーラーは検問所の前に横づけされた。荷台のハッチが左右に鳥の翼のように展開し、その中身が顕わになる。

黒い鎧のような外装をまとった人型。

「こ、これは……」

「アイゼントルーパー。調査のためにこちらに配備させてもらう」
ゼインは有無を言わせぬ口調でそう告げた。

第6話「侵入」

紅色の月が黒い夜空にぽっかりと浮かび上がっていた。砂漠から町へと吹き抜ける風が肌に冷たい。星はほとんど見えない。過去の戦争などでこの星の大気は汚れてしまったからだ。ぽつり、ぽつりと昔は一番輝いていた星が、今うつすらと見える程度。

リンレイベルの中央にそびえ立つ神の住まう塔。その足元には砂漠の町には不似合いなほど緑の茂る公園がある。どの町でも塔の麓は大概そのように整備されている空間となっている。いわば権力の象徴。神の存在の大きさというものを物語っていた。

その茂みの一部があやしげにうごめいた。

がさがそがさがそ……

姿を現わしたのはエミネだ。服装は露出をなくすようにタイトのようなものを履いた以外、昼間と変わりはない。指先が出るタイプの小型のグローブをはめた手には、小型の自動拳銃が握られている。ただ最新式のものに比べれば骨董品とも言えるような古い型だ。使いこまれているようで、ところどころ傷が目立つ。

「さ、て……」

一しきり辺りを見回すと、エミネは暗視ゴーグルつきのヘッドセットをつけた。戦後の発電不足のため、公園といえども点灯している街灯はほとんどない。それゆえ視界はほぼ闇で閉ざされている。

ふと視界の隅にうごめく物体を見つけた。

——アイゼントルーパー……？

視界に入った物体——それは人型をした黒い影だった。この影は、大戦中に開発された人型兵器・アイゼントルーパー。別名・疲れを知らぬ兵士。その名の通り、機械の兵士だ。

下手に動けばこちらが発見されてしまうだろう。

——さて……どうしようかしら……

さすがのエミネでもここまで警備が厳重とは思わなかった。アイゼントルーパーが一体いるだけで、調査の困難さというものは格段に上がる。それにまさか一体だけとは限らないだろう。

どうにかして塔までたどり着かなければいけない。

と――――

バアン！

――破裂音？……いや、銃声？

音に反応したのか、アイゼントルーパーのゴーグル内の目が点滅をする。そしてすぐに音のした方向へと消えて行った。

「ら、ラッキー」

つぶやくと事前に調べてあった塔の裏口へとエミネは向かった。

裏口はその名の通り、正面と比べれば小ぢんまりとしたもので、草むらに隠れるようにして存在していた。ちなみに正面の門はもっと豪華なもので、その権威を顕している。

草むらをかき分けると、塔の壁面に行き当たる。そこには人一人が通れるだけのドアが作られていた。脇にはテンキーが設置されている。赤い小さなライトが点灯していた。

「腕の見せ所ですかね」

わきわきと手を動かすと、すさまじいスピードでテンキーにコードを打ち込む。最後にエンターキーを押し込むと、一瞬の間の後、ライトが緑に変わる。

「これで、よし、と」

ドアのすぐ前まで進むと、ドアは自動で開いた。

第7話「警報」(前書き)

しばらく間が空いてしまいましたが、しっかりと続きますので、これからよろしくおねがいします。

第7話「警報」

塔の内部に一般市民が入るのは容易だ。

なぜなら週に一回、集会が開かれるからだ。ステンドグラスの美しい広い講堂となっており、巨大なパイプオルガンが入り口の反対側に据えられている。大戦前の文献に残る教会という場所を模して作られたとのことだ。

裏口から入った場合、そこを通ることではない。あくまでそちら側はこの塔の表向きでしかないということだ。裏口から入った場合には直接、この塔の裏の部分に触れることとなる。

神の住まう領域。

表でも裏でもそれは変わらない。ただ変わるの是一片のみ。

信仰の対象か、支配の手段か。それだけだ。

エミネが調べようとしているのは、その裏の部分。

神の存在意義だ。

そして、神官と呼ばれる地位の人間がこの世界には存在する。それは実質、政治などの権限を握っているに等しい。神に最も近い人間たちなのだから。

いわば彼らが神を支配の手段としている、というのがエミネの考えだ。その裏づけのための調査である。

少しの光だけでその空間全体が明るくなるほど、塔の中は白い。純白で、無垢なイメージをそこから受ける。もちろんそう思わせることだけが目的ではないのだろう。

白ければ汚れは目立つ。少しの異変でもすぐにわかるということだ。

「ま、こうすれば問題はないわけだけど」

真っ白な空間の一部からそんな声がした。エミネだ。その姿は白の空間に溶け込み、肉眼ではどこにいるか確かめることができない。

電子迷彩。過去の大戦がもたらした技術革新。その成果の一つである。エミネが露出を減らしていた理由がこれである。彼女の着ているボディスーツには電子迷彩の機能がつけられており、ヘッドセットに機能中枢がある。

この技術のおかげで、戦闘中の隠密行動の難度は格段に下がった。ただし、その反面、センサー類の技術発展というものも著しかった。電子迷彩を施したところで、体重が消えるわけではないし、熱量の放出も隠し切ることとはできない。

そのため、電子迷彩中でもエミネは慎重に行動せざるを得なかった。

まさかこのような場所に超高感度センサーがないわけがないだろう。普通のカメラの類はやたら目に入った。その一つにでも熱探知用のものがあれば気づかれてしまう。

幸運にもいままでそのセンサーはなかったようだった。

入り口から続く通路を抜けた先には、巨大な円柱の底のような空間が広がっていた。エミネが来た通路の反対側にも入り口が……いや、この空間を中心に放射状に通路が続いているようだった。円柱の側面には通路の入り口がいくつもある。そして中央にそびえる螺旋階段。

「この上ね……」

エミネは油断なく辺りを見回すと、螺旋階段へ脚をかける。その瞬間だった。

——・ヴィ———・ヴィ———・ヴィ———

破裂するようにして警報音が響き渡った。

第8話「正体」

——・ヴィ————・ヴィ————・ヴィ——

破裂するようにして警報音が響き渡った。

「しまった——」

圧力探知機……おそらく階段に仕込まれていたのだろう。それがエミネの体重に反応して、警報を響かせた、といったところか。

「——っ？」

ダン、という音とともにここへ続く通路のシャッターが目の前で下ろされた。これで完全に閉じ込められた。道はこの階段を上るしかないわけだが……

それだけでは済まなかった。階段の先を見上げたエミネの視界にいくつもの黒い影が映り込む。

アイゼントルーパー……！

計六体の機械仕掛けの兵士が円柱を降下してくる。そのカメラアイが不気味に赤く光った。明らかにこちらの存在に気づいている。

『……………』

着地に成功したアイゼントルーパーが無言で腕に内蔵されたミニガンを構える。少しでも動けば、間違いなく蜂の巣にされてしまう。もう無駄だと、電磁迷彩を解除する。

おとなしく投降を促す……？ いえ、そんなことするわけない。塔の内部に入ったのだから。

エミネの脳裏には次の瞬間には殺されるビジョンしか存在しなかった。

だが——

ガウン……ガウンウン!!!

鼓膜を破らんばかりの破裂音。それが銃声だとわかるのに時間はいくらもなかった。頭部を破壊されたトルーパーが火花を散らしながら倒れる。

さらに目の前にその銃声を轟かせた影が現れた。まるでエミネをかばうかのようにして、トルーパーと同じように降下してきた影は、彼女を軸にして一回転した。手にした二挺のハンドガンを連射しながら。

白い空間に、乾いた音が響く。床を転がる空薬莖。微かに漂う硝煙の香り。

その中央に男がいた。

裾がボロボロになった灰色の外套をまとい、手には無骨なデザイン的大型拳銃。青色をした少し垂れ気味の眼を隠すかのように伸びた髪は赤紫色、そこに不気味な仮面がひっかかるようにしてつけられていた。

「あ……あのときの馬鹿」

「あ？」

ふと、この街に入ったときの記憶が蘇る。審査受付でひっかかっていた仮面をつけた男のことを思い出す。

「馬鹿ってなんだよ。助けられという」

拗ねたのだから怒っているのだからかわからない表情で男は言い返した。「だいたいお前、こんなところにいるなんて誰だよ？ 見たトコ、神官ってわけじゃなさそうだしな……」

男は銃をしまいながら、エミネをじっと見た。

「あ、あなたこそなによ。いきなり現れて……こいつらの指揮官とかじゃないの？」

エミネは慌てて言い返す。トルーパーと同じ場所から来たのだから、てっきり指揮官かなにかと思っていた。男は鼻で笑う。

「それこそ馬鹿な考えだな。まったく逆の立場だよ、俺は」

一瞬の後、すぐにその言葉の意味がわかる。

「あ……あなた、まさか」

直感的に察する、彼が誰なのかを。なぜこのような場所にいるのかということ。

「——『神殺し』……」

「正解」

背筋を冷や汗が滴る。

まさか、こんなところで、出会うとは。あの『神殺し』に。唯一にして絶対の神を殺す存在に出会うとは……

「まあ、ちゃんとした名前もあるんだけど……アルファ・レイング」

「わ、私は、エミネ・クラックス……ジャーナリストよ」

「ふうん……ジャーナリスト、ねえ」

男——アルファは意味ありげな笑みを浮かべた。

「まあ、いい。それで、目的は？」

表情を隠すかのようにアルファは取り出したサングラスをかける。

「……神の正体。それを探るのが私の目的よ」

「それは……ご苦労なこったな。わざわざ自分からこんなところに入るほどとは」

「あなたこそ……わざわざ神を殺して回っているなんて、どうして？」

誰もが知りたいであろうその問いを口にする。だが、アルファはエミネを一瞥しただけだった。そしてその視線を階段の上へ向ける。

「さ。この先が『神の間』だ。行くだけの度胸はあるんだろ？」

エミネはこくりと頷いた。

第9話「目的」

「さあて、トルーパーの配置はいいかね、ジェシカ？」

やる気のない声に反して、気合を入れるかのように軍帽をかぶり直すゼイン。横では彼の部下兼秘書のジェシカ・トルクマンがヘッドセットに向かって指示を飛ばしていた。

二人は日中にこの街『リンレイベル』へ到着し、アイゼントルーパーを配置、侵入者の調査までを行っていた。

塔のすぐ近く、公園の内部に作戦本部テントを展開し、そこに何人も軍人を配置した。

「内部に配置したトルーパーは全機通信が途絶えました。……本当にエミネ・クラックス単独での仕業でしょうか？」

「そうだなあ……」

ゼインは無精ひげの浮かんできた顎を撫でる。

エミネ・クラックス。それが二人の今現在追っていた人物だということはずぐにわかった。神の正体を調査しようとしている。この世界では調べようとしただけで大罪になることだ。まだ年齢は十六。果たしてそんな少女にここまでやることができるのだろうか。

「ありえない。ま、カンだがな……普通の人間にアイゼントルーパーと戦うなんて考えは浮かばんよ。……神を調べようという考えはあったとしてもな。なにか見落としがあるかも知れん。もう一度リストを見直してみるべきだ。軍曹！」

独り言のようにぶつぶつとつぶやくと、手近にいた軍服姿の男を呼び止める。

「入国者リストをもう一度洗いなおせ。不審者じゃなく、名前でな。アルファ・レーシング。その名前だ」

「は」

いきなりそう命令された軍曹はすぐに近くに設置された本部テン

トへと向かった。

「……アルファ・レーシング——神殺し、ですか？」

「ああ。こんなことをする人間、アイツ以外考えられない」

「しかし、本名で登録しているとは思えません？」

「逆だよ。そう思うからこそ本名で入国する。アイツの常套手段だ。一般の人間にアルファ・レーシングという名前は知れ渡っていないし——機密保持が目的だが、厄介なことだ——その方がこちらに発見されるのが早くなるからな」

「発見？」

ジェシカが聞き返すと、ゼインは苦笑した。

「挑発とかじゃないのかね……」

そして彼もヘッドセットを装着する。

「洗い直しを待っている時間もない。すぐにトルーパーに塔を包囲させる。残りはすべて内部に入れ、神の間までやつを行かせるな！」

神殺し……その名に、ジェシカの体に緊張が走る。彼女、そしてゼインの指揮する部隊〈フェンリル〉が常に追ってきた男。それが『神殺し』だった。

連合政府直属の対『神殺し』部隊〈フェンリル〉。ただ『神殺し』を追跡し、処刑するためだけに創設された部隊。その隊長がゼイン・メイラー。副隊長がジェシカ・トルクマンである。

ただ彼らも神の存在の本当の目的を知らない。

第10話「起動」(前書き)

少し間があいてしまってますみません。この話でようやく第一部の核心へ迫ります。

第10話「起動」

ピー、と電子音が鳴り響き、赤い文字がテンキーの上にあったウインドウに浮かび上がる。

「ダメ……開かない。ここだけロックが強固すぎるわ……」

「だろうな。ここが『神の間』。不可侵の領域だからだ」

アルファとエミネは螺旋階段を上がり、神の間、その入り口まで到達していた。背後には二体のアイゼントルーパーが横たわっている。どちらもカメラアイと胸部の電源装置が破壊されていた。

「そんな……ここまで来て」

「どけ。ここからは俺の仕事だ」

アルファは懷からあの巨大で無骨な銃を取り出す。

「……！」

近距離で初めてまじまじとその銃を見て絶句するエミネ。

「目を閉じておけ」

マジックバレットガン。この世界にはリアルバレットガンとマジックバレットガンの大きく分けて二種類の銃が存在する。前者は文字通り実弾を使用する銃のことだ。後者はエネルギー弾を使用する特殊なもので、威力を変えることなどができる前大戦での産物である。

ただアルファの持つものは拳銃という規格から大きく外れたものであるのは、素人のエミネにもはっきりとわかった。彼の手にも収まりきらないグリップ、そしてやたら厚い銃身には十字架を模したような装飾がほどこされている。

ズドン！

扉が開錠用のテンキーごと吹き飛ばされる。ばらばらと瓦礫と粉塵が舞う中、二人は神の間へと進む。

「ここが……」

「『神の間』だ。神官でもそう易々と入れる場所じゃない」

下層と同じく純白を基調とした、礼拝堂のような空間。ここにもパイプオルガンがあり、そのパイプが壁を伝っている。

そしてエミネの目を奪ったのはオルガンの前に鎮座した巨大な機械だった。ずんぐりとした胴体を四対八本の脚のようなものが支えている。胴体下部からは何本もパイプが伸び、それがオルガンとつながっていた。

「あれ……は？」

「……この世界の人間が『神』と崇めているモノだ」

『神』——それは旧大戦中の思考型多脚戦車だった。ただそのことを知らないエミネは眉をひそめる。

「旧大戦の遺物だ、これもまた、な。大戦中は、学校で習ったかも知れないが、様々な兵器が生まれた。今の時代のものに比べたら……いや、おそらくそれまでの時代のものに比べても、最も発展したものが生まれたのだろう。その一つがこの思考型多脚戦車だ。自律式AIを搭載した兵器。自ら考え、より効果的な方法で戦争を行うための兵器だ。まあ、正確にはこいつの後ろにある演算機が『神』と呼ばれているわけだがな」

「そ、そんなものが存在するというの……？」

「現に目の前にあるだろ」

アルファの言葉にエミネは啞然とした。

『兵器』が『神』？ この世界の人間は、こんな世界にした大戦の兵器を『神』としているの？

「驚くのも無理はない。こいつらは戦争で使われたものだが、その次の時代にまで使われることとなったんだからな。……旧大戦は世界のほとんどを焼き払い、戦争が終わっても世界は混沌としていた。その世界の統一のために用いられたのが思考型兵器とそのバックアップのための演算機だ。なにせ、そのころは人間よりも早く、緻密に物事を考えるまでに進化していたらしい。そして思考型兵器を保

持っていた軍部が世界の政治の実権を握ることにもなった」

「こんな……ものを……？」

立ち尽くすエミネの横でアルファが冷静に、淡々と言葉を続ける。

「そう、こんなものだ。ただこんなものでも国家……世界政府の最高機密でもあるんだ、極刑は免れないだろうな」

「そんな！ 私はただ――」

「残念。時間切れだ」

アルファは扉を吹き飛ばした銃を持った手とは反対の手にも同様のマジックバレットガンを握った。

――ン――ヴヴヴヴウウウ………

第11話「戦車」(前書き)

だいぶ間があいてしまいました。一応、第一部完結までは今年中に更新したいな…と(汗)

第11話「戦車」

——ヴヴヴヴウウ………

微かな、本当に微かな起動音とともに眼前の多脚戦車のカメラに光が灯った。

「極刑っていつでも、逮捕やらなんやら、無駄な過程は踏まない。その場で即死刑だ!」

反論しようとしたエミネに突っ込む。彼女を巻き込み、アルファは床を転がる。一瞬前まで彼のいた空間を戦車のレーザーが射抜いた。

「な……な……」

「死にたくないなら隠れている。この部屋から出るのが安全だが……」

アルファが途中まで言いかけたところで、戦車から第二波が放たれる。ただし二人を狙ったものではない。

レーザーがないだ先は入り口の扉の上。ズン、という音がして、入り口はたちまち瓦礫の向こうに埋まる。

「ちっ……」

脱出経路は塞がれた。どうしても自分たちを逃がしたくないらしい。そうプログラミングされているのだろう。

アルファは辺りを見回す。せめて、エミネが隠れられる場所でもあればいいのだが……

——仕方ない。

「危なくなったら逃げろ」

「え? ——ちょ、なにっ?」

エミネの返答を待つまでもなく、アルファは崩れた瓦礫の影にエミネを押し込んだ。

「さて……いくぜ、タコ足」

軽く床を蹴ると次の瞬間には戦車から攻撃が放たれていた。これを軽々と回避。

……したかと思うと、そのまま砲身が回転しレーザーが壁をないでいく。アルファが移動するスピードよりも砲身の回転スピードの方が若干速い。ジッと音を上げて外套の裾が焼けた。

——追いつかれるか？

そのことを悟ると、アルファは横っ飛びをしながら銃を構えた。

ダン——！

扉を吹き飛ばしたのと同じ威力のまま弾丸を放つ。着弾と同時に戦車が衝撃で仰け反る。……仰け反るだけだった。さすがに旧大戦中は前線で使用されているものだけに並の装甲ではないのだろう。

もちろん今までその戦車たちを相手にしてきたアルファは冷静に対処する。仰け反った戦車に対し、驚くべき瞬発力で接近し、肉迫。カメラアイに銃口を向ける。

「これなしで狙えるかな？」

引き金が引かれ、銃口からエネルギー弾が溢れるようにして射出される。弾丸は違うことなく戦車のカメラアイを射抜いた。さらに弾丸は戦車内部へと貫通する。本体を貫き、背後までエネルギー弾が貫通した。

「……………」

これはさすがに効いたらしく戦車本体からぶすぶすと煙が上がった。

しかし——

「まだ止まらんか」

ギュララララララララ——

本体の周囲に取りつけられた副砲が狙いもつけずに、でたらめに乱射される。

「ちっ」

アルファに命中することはなかったが、流れ弾が四方の壁をえぐり、辺りに瓦礫の山を築く。弾丸の雨の中をアルファは瓦礫から瓦礫へ移動し逃れた。

「きゃあ！」

エミネの悲鳴。すぐ近く。

「……大丈夫か？」

気づけば最初に彼女を押し込めた瓦礫の影まで逃げてきていた。すぐ横に彼女がいた。

「大丈夫なわけないでしょ！ 倒せるんじゃないの？」

「ああ。できるさ。お荷物がいなりやな」

「なにそれ！ 私のこと？」

「無駄に見つかるしな」

「ぐ……」

「ま、雑談もここまでだ。そろそろ仕留めないと、後ろを塞がれる」

「後ろ？」

「ああ」

アルファが地を蹴る。横っ飛びのまま両手の銃をかまえると、引き金を引く。弾丸は戦車に命中するものの、逆に位置を悟られ、すべての砲門がこちらを向いた。

殺意を感じる。相手は無機物のはずにもかかわらず、確かに感じる圧倒的な殺意。果たしてそれはアルファの錯覚か、それとも現実なのか。それを感じさせるまでに『神』は進化したというのか。

向けられる銃口。

向けられる砲口。

ドクン————

一瞬脳裏をよぎる、最悪のイメージ。

全身が弾丸で引き裂かれ、砲弾で粉々に碎け散る。

叩きつけられる身体。

あらゆる未来のイメージがフラッシュバックのように見える。

———うるせえ。

それらをすべて無視。

一つのイメージ。

先に火を噴いたのはアルファの銃だった。

第12話「脱出」

先に火を噴いたのはアルファの銃だった。

イン……ンンンンン！！！！

連射された弾丸は戦車の副砲である20ミリバルカンをすべて破壊した。ただそれを犠牲にしても戦車は主砲でアルファを狙おうとする。

「それが狙いだけどな」

一瞬が永遠に引き伸ばされ、砲口の、その奥で砲弾が放たれようとしているのが見える。見えるはずのないほどの一瞬のこと。それがはつきりとわかる。引き金を引く。

ズン——————ゴウツ！

次の瞬間には戦車の車体が爆発、炎上していた。

爆風が辺り一帯を舐めるように蹂躪する。

不意に、アルファの脳裏をエミネの姿がよぎった。

——あいつを押し込んだのは……

エミネの姿を視認すると、彼女の上には巨大な瓦礫が今まさに落ちようとしていた。

「ちっい！」

瞬時に構えていた銃口をそちらに向けると引き金を引く。間に合うか？

放たれた弾丸は瓦礫を射抜き、砕いた。

「……無事か？」

「………なん、とかね」

エミネは腰を抜かしているようにその場に座り込んでいた。

「ん……わりとタフなやつだ」

「ん？　なんか言った？」

「……いや、なんでもない。早いところ逃げよう。すぐに追っ手が――」

アルファは急に言葉を切り、すぐ傍の瓦礫と変わった壁に耳を押し当てた。

「どうしたの？」

「もう来ているらしい。すぐ向こうに気配がする」

アルファはエミネの手を取り、引き起こすと肩をかしつつ壁から離れた。おそらく追っ手に自分たちの位置はばれているはずだ。それならばなにがなんでも自分を捕まえに来る。行く先が瓦礫で塞がれているものなら、それを爆破することになんの躊躇もないだろう。

自分を追いかけている存在がどんなものか、アルファはよく知っていた。

逃げる手段は……

弾痕の刻まれた壁。

瓦礫の山。

破壊された戦車。

巨大なパイプオルガン。

八方塞だった。来た道以外に逃げられるような道はない。

「ちっ……」

「アルファ……」

舌打ちをする彼にエミネは不安そうな表情を浮かべている。逃げ場がないのだ。仕方ない。アルファ一人ならば多少なり逃げられる確率があるが、今はエミネも一緒だ。

「無茶するぞ……」

一つだけ、妙案があった。

「え？」

「逃げるのに無茶をするが、構わないな？」

「……い、いいわよ。それぐらいしないと逃げられないんでしょ？」

「ふ……そうだな」

「あ……」

笑った。それはエミネがアルファの笑いを見た最初の瞬間だった。まるでこの危機的状况を楽しんでいるかのような笑み。

ズゴン……………！

重低音が響き渡り、入り口に積まれた瓦礫が内側に吹き飛ばされる。濛々と粉塵を上げる入り口から現れたのは漆黒の鎧兜をまとったかのような兵士――アイゼントルーパーだ。

今度はいきなり攻撃を仕掛けてくる様子はなかった。それがわかっていたのか、アルファは銃を下げたままだ。なにかを待っているよう……

「投降しろ！　〈神殺し〉」

アイゼントルーパーたちの背後から人の声。おそらく今このトルーパー隊を率いている人物だろう。

「……嫌だと言ったら？」

「決まっている……」

白煙の向こうからその人物が姿を現わす。

カーキ色の軍服。屈強そうな身体。刈り込まれた金髪。ゼイン・メイラーだ。横にはジェシカ・トルクマンが秘書のように控えている。

「この場で処刑だ」

冷徹そうなグレーの瞳がまっすぐにこちらを捉えていた。その目に意志の揺らぎなど微塵も見られない。本気でそう言っているのだ。「さすがはヘフェンリル」隊長ゼイン・メイラー。なんの躊躇もなくそう言い切るか

「それが仕事だからだ、アルファ・レーング」

エミネにはどこか二人が以前からの知り合いのように感じられた。

互いに敵であるはずなのに、お互いの武器は収めたまま。

ゼインに至っては武器すら持っていなかった。両手はズボンのポケットに入れられたままだ。アルファが手に持った銃で殺そうと思えば殺せる。しかしアルファはそうしない。

「生憎、捕まってやる義理もないんでな。逃げさせてもらう」

「すでに塔の周りは封鎖しました、逃げられるものなら逃げて御覧なさい」

ゼインの後ろに控えていたジェシカが挑戦的に言う。

「上等……」

アルファは外套をひるがえす。同時に円筒形をしたものが彼の前方にばら撒かれた。

「…耳塞いどけ」

すぐ近くまで顔を近づけたアルファがエミネにそう告げるやいなや、彼はエミネを抱えた。次の瞬間、強烈な光と音がその場を満たす。

「スタングレネードかつ！」

光の向こうでゼインが呻く。さすがに軍隊で訓練されているというべきか、ゼインは即座に命令を下す。

「全トルーパー、一斉射撃！ やつを仕留める！」

アイゼントルーパーたちが武器を構えている間にアルファは背後にあったパイプオルガンに向かって走る。ゴールはその上。先ほどからの戦闘でも割れなかったステンドグラスだ。オルガンを蹴り、跳躍。発砲。

バリイーン！！！！

マジックバレットの直撃を受けたステンドグラスはきらびやかに散る。アルファはエミネを抱えたままステンドグラスのはめ込まれていた壁の縁に到達した。見下ろすと、トルーパーたちが銃口を向けている。

しかし狙いは定まらないはずだ。訓練を受けている軍人がスタングレネードに対応できたとしても、トルーパーたちは所詮機械。閃光で目をやられてしまうのはどうしようもないことだからだ。それが不意打ちならなおさら。

「待て！ アルファ・レイング！」

ゼインの叫びを背に、アルファは塔から飛び降りた。

第13話「始まり」

朝日がゆつくりと昇り始めている。先ほどまでは砂漠の先にある地平線に七色の虹が横になっているように見えていたのだが、今は太陽の輪郭がおぼろげに見え始めていた。

塔の頂点付近から微かに煙の上がる『リンレイベル』を背に、エミネは砂埃に汚れたホバーバイクを押していた。

「本当に急いで逃げなくていいわけ？」

彼女は横を歩いている男――アルファに話しかける。彼のペースに合わせてエミネはバイクを押して歩いているわけであるが、彼女の予想では塔で遭遇した部隊が追って来るものばかりだと考えていた。

「大丈夫だ。あいつらの仕事は〈神殺し〉を追いかけると同時に、神の間の修復も行わなければならない。あの間に入れるのは神官たちを除けば〈フェンリル〉の部隊員ぐらいなものだからな」

「なんなの、その〈フェンリル〉て？」

「対〈神殺し〉専門の部隊だよ。正確には神の真実を隠す者でもある」

「ふうん……」

エミネは気のない返事をした。が、

「……待って。それじゃ、もしかして私もこれから追われるってこと？」

「そうだな。もしブラックリストが〈フェンリル〉に存在するのなら、間違はなく今回の一件で名前が載っただろう」

しれっとした態度でアルファは返す。彼にとってはどうでもよいことに違いない。エミネは恨めしそうな目で彼を見た。

「……連れて行きなさいよ」

「？」

アルファは立ち止まるとエミネの方を見た。

「どうしてだ？」

「……私は情報屋よ？」

「『もどき』だろ。侵入もろくにできない無計画なガキだろ？」

鼻で笑うアルファにエミネは食い下がる。

「な……歳なんて大して変わらないじゃないの！　ってかつれてけ
」

再び歩み始めたアルファにバイクを押しながらエミネはついて行った。

第13話「始まり」（後書き）

とりあえず第一部が終わりとなります。しばらく忙しいのでまた「神の殺し方」の連載が途絶えてしまいますが、ご了承ください……
…ではまた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5453b/>

神の殺し方

2010年10月12日00時52分発行